

# ヒガンバナに思う

今年は、お彼岸を過ぎても三十度を超える夏が続き、ヒガンバナの開花も大変遅れ、十月に入ってから、満開を迎える事になりました。

ヒガンバナは、球根で育つ植物ですから地中の温度が秋の温度に下がらなければ花芽を伸ばしません。「寒さ、暑さも彼岸まで。」と言われたように、かつては彼岸頃になると、ぐんと気温も下がり、まさに「一斉に誰かが号令をかけたように、花芽がのびて、一面の花ざかりとなりました。

しかし、近年は日差しの強い日よりの開花は大変と遅くね、日陰の球根の花芽の育成は何万件ものアクセスがあるのです。特にカメラ愛好家の方々の投稿は、カメラマンの腕の競演で、いろいろな角度から撮影された、常楽寺の花が紹介されて、それをまた、多くの方々が見て下さって、多くの訪問者を誘って下さっているのです。

千葉県や茨城県、神奈川県など遠方の方々がヒガンバナの方々が、グループで訪れてくださいました。時には、遠方から「インターネットを見たけれど」と電話を掛けてこられたりと大変でした。

皆さんもよく知っているように、かつてはヒガンバナを、「ジャンボンバナ」と呼んで、みんなから大変嫌われる花でした。少年の頃には、花が咲くときの棒を振り回して

ちと大きな差が生まれてきました。

それにしても、今年は例年になく大勢の人が訪れ、大変な賑わいでした。観光バスも多い日には、何台も来られました。

本年は、寺の「つすま明王堂」では、切り絵と書による『平家物語』展を開催してました。「平家物語」展にも大勢の人が立ち寄り、芳名簿にお名前を書いてくださった方も千人を超えました。

ありがたいことに、新聞の報道と共に、インターネットへの報道も多く、「太田市常楽寺」で検索すると、常楽寺の花の写真と共に、たくさん紹介文を見ることが出来ます。

花の首をはねて回り、家に持って帰れば叱られた花でした。

全国的にみても、「シトバナ」「ドクバナ」「ユウレイバナ」「シビレバナ」「ホトケバナ」「ステゴバナ」「シヨクバナ」「ソウシキバナ」「ヤクビヨウバナ」「キツネノチヨウチン」「キツネノタイマツ」など、多くの名前が付けられています。が、「マンジュシャゲ」という名は梵語で、お釈迦様が悟りを開かれた時、天から降ってきた花だと言われています。

今は、大変な人気の花で、ヒガンバナの沢山咲く所には人々が大勢押しかけています。近くでは伊勢崎の早川淵のヒガンバナや、全国一と言われる埼玉県高市の中着田にも、大変な人々が見学に訪れていますね。

